

## 「雷峰怪蹟」試訳（下）

|       |                                                                                             |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/35089">http://hdl.handle.net/2297/35089</a>             |

## 「雷峰怪蹟」試訳（下）

丸井貴史

時光易過、倏忽半載。一日、是二月半、許宣同着幾個朋友到臥佛寺前見臥佛。忽走到寺門前、見一道人在那裏禿髮並施符水。許宣無心、偶上前去看看。那道人一見了、便喫驚道「官人頭上一道黑氣、定有妖怪纏身。其害非淺、須要留心」。許宣原有疑病、一聞道人之言、便不禁伏地拜求救度。那道人與他靈符二道、分付他三更燒一道、自家頭髮裏藏一道。許宣到家、忙將一道悄悄的藏在頭髮之內、這一道要等到三更燒化。

時は過ぎやすく、たちまち半年が経った。二月半ばのある日、許宣が友人たちと臥佛寺へ臥佛を見に行くと、寺門の前で一人の道士が薬を売ったり符水を配ったりしていた。許宣が何の気なしに近寄って見に行くと、道士は彼を一目見て驚き、「あなたの頭上には妖気が立ち込めている。きつと妖怪が纏わりついているのだらう。その害は軽くありませんぞ。用心なされ」と言った。許宣はもともと疑いやすい性格だったので、道士の言葉を聞くやいなや、思わず土下座して救いを求めた。道士は二枚の靈符を与え、三更の時刻に一枚を焼き、もう一枚を自分の髪の中に入れておく

よう言いつけた。許宣は家に帰ると急いで一枚をこっそり自分の髪の中に入れ、もう一枚は三更を待って焼くことにした。

暗候時、白娘子忽嘆口氣道「我和你許久夫妻、尚沒一些恩愛、反信別人言語、半夜三更、要燒符來魔我、你且把符來燒燒看！」許宣被他說破、便不好燒。白娘子軋轡過符來、燈上燒了、全沒一些動靜。白娘子笑道「如何？我若是妖、必然做出来了」。許宣道「這不干我事。是臥佛寺前一個雲遊道人說你是妖怪」。白娘子道「他既說我是妖怪、我明日同你去、且叫他變一個怪形与你看看」。

暗くなった頃、白娘子は嘆くような口ぶりで「私たちは夫婦になつて久しいのに、少しも愛情を注いでくださらず、それどころか他人の言葉を信じ、三更に護符を焼いて私を避けようとなさるのですね。さあ、焼いてみてください！」と言った。許宣は彼女に見破られて焼きづらくなつたが、白娘子が護符を奪い取つて燈火で焼いたところ、何事も起こらなかった。白娘子が笑つて「いかがですか？もし私が妖怪なら必ず姿を現すはずでしょう」と

言うと、許宣が「私は関係ないよ。臥佛寺の前にいた旅の道士がお前を妖怪だと言ったんだ」と答えたので、白娘子は「その人が私を妖怪だと言ったのなら、明日一緒に行って、彼が私を妖怪の姿に変えるのを見てもいいでしょう」と言った。

次日、分付青青照管下处、夫妻二人来到寺前、只見一簇人围着、那道人正在那裏散符水哩。白娘子輕輕走到面前、大喝一声道「你一个不学無術的方上小人、曉得些甚麼？怎敢在此胡言乱語、鬼画妖符、妄言惑衆！」那道人猛然聽了、喫了一驚、忙将那女娘一看、見他面上氣色古怪、知他来歷不正、因回言道「我行的乃五雷天心正法、任是毒妖惡怪、若喫了我的符水、便登時現出形来、何況你一妖女。你敢喫我的符水麼？」白娘子聽了、笑道「衆人在此做個証見。你且書符来、我喫与你看」。道人忙忙書符一道、遞与白娘子。白娘子不慌不忙、接將過來、搓成一团、放在口中、用水吞了下去、笑嘻嘻立了半晌、並無動靜。看的人便七嘴八舌、罵將起来道「好胡說！這等一個女娘子、怎說他是妖怪？」道人被罵、目瞪口呆、話也說不出一句。白娘子道「他方上野道、毀謗闍賢、本該罰他墮落、今看列位分上、只吊他一索罷了」。一面說、一面口中不知念些甚麼、只見那道人就像有人細縛的一般、漸漸的縮做一团、又漸漸的高高吊起、口中哼個不了。衆人看見、尽驚以為奇、連許宣也驚得呆了。白娘子道「若不看地方干係、把這妖道吊他一年纔好！」因輕輕噴口氣、那道人早立時放下地来。那道人得能落地、便只恨爹娘少生兩隻脚、飛也似的去了。衆人一闕而散、夫妻依旧回家。正是

邪邪正正術無辺 紅日高頭又有天

寧在人前全不会 莫在人前会不全

次の日、青青に留守を言いつけ、夫婦二人で寺の前に来ると、人々が取り囲む中、あの道士が符水を配っているのが見えた。白娘子はそっとその前に行くと、大声で「あんたみたいな何の能力もない旅の道士に何が分かるっていうの？ どうしてここででたらめを言うような手口で人々をたぶらかそうとするの！」と言った。道士は突然そのように言われて驚き、慌ててその女を見てみると、彼女の気色が尋常ではないので、彼女が真つ当な人間ではないことを悟り、「私が修めたのは五雷天心の正法だ。どんな妖怪であつても私の符水を飲めばたちまち姿を現す。お前のような妖女ならなおさらだ。お前に私の符水を飲む勇氣があるか？」と言いつ返した。白娘子はそれを聞いて笑いながら、「皆さんがここで証人として見ていらつしやいます。符を書いてごらんさい。飲んでみせてあげましょう」と言った。道士はすぐに符を書き、白娘子に手渡した。白娘子はおもむろにそれを受け取り、小さく丸めてから口の中に入れ、水で飲み込んだ。にこにこしながらしばらく立っていたが、何の変化もない。見ている人々は口々に「でたらめだ！ この婦人をどうして妖怪だなどと言うのだ！」と罵り始めた。道士は罵られてあつけにとられ、一言も発することができなかった。白娘子は「このろくでなしの道士は私の名譽を傷つけました。本来ならあの人を徹底的に懲らしめてやるのですが、今日は皆さんに免じて、彼を吊り上げるだけにしておきましょう」と言つて、何やら口の中で唱えると、道士はまるで誰かに縛りあげられているかのように、丸く縮まってだんだん高

く吊り上げられ、うめき声を挙げ続けた。群衆はそれを見て驚き、許宣もあつげにとられてしまった。白娘子は「ここのお役人の迷惑になるのでなければ、この怪しい道士を一年くらい吊り上げておくのだけれど」と言つて、すぐに道士を地面に降ろした。道士は地面に降りると、両親が二本足にしか生んでくれなかったことを恨み、飛ぶようにして去つていった。見物人はがやがや言いながら帰つていき、夫婦はもとのように家に帰つた。まさに

邪も正も方術は広大無辺 太陽の上には天がある  
少しばかりできるより 何もできない方がまし

過了些時、又是四月初八日仏生日、許宣一時高興、要到承天寺去看佛会。白娘子道「甚麼好看？」既要去、因取出两件新鮮衣服替他換了、又取出一把金扇、上繫着一個珊瑚墜兒、与他扇。又分付他「早早回来、忽使奴記掛」。許宣答應了、便穿着一身華服、搖搖擺擺、到承天寺來鬧戲。耳朵裏雖聽得乱哄哄傳說、周將仕家典庫内不見了許多金珠衣物、現今番捕拿人、許宣却全不在意、自同着燒香的男女遊玩。不期番捕有心、看見許宣身上穿的、手裏拿的、与失單上相同、便攢近許宣面前道「官人扇子可借我一看」。許宣不知是計、遂將扇子遞与公人。衆公人看了是真、便吆喝道「賊脏有了、快快拿下！」衆人齊上、遂把許宣一索子綁了。好似

数隻皂雕追紫燕 一群飢虎啖羊羔

しばらくして、四月八日の釈迦生誕の日、許宣はふと承天寺の灌仏会に行きたくなつた。白娘子は「何がおもしろいのですか」と言いながらも、許宣が行きたいと言うので新しい衣服を二着取

り出して着替えさせ、さらに金の扇子を取り出して珊瑚の下げ飾りをつけ、彼に渡した。そして「早く帰ってきて、私に心配させないでくださいね」と言つた。許宣は返事をして華やかな衣服を身にまとい、鷹揚として承天寺にやってくるやうに歩いていった。

そこへ、周將仕の家の蔵からたくさんのお宝や衣類がなくなつて、今、捕吏が犯人を捕えようとしているところだという噂ががやがやと耳に入ってきたが、許宣はまったく気に留めず、焼香している人の流れにしたがつて寺の中を回つていた。するとほかからずも捕吏が、許宣の身につけているものや手に持っているものが盗品一覽表にあるのと同じであることに気づき、許宣の前へ走つて行き、「失礼ですがお持ちになつてゐる扇子を見せていただけませんか」と言つた。許宣はそれが計略とは知らなかつたため、扇子を彼に手渡した。役人が、本物であることを確認して「盗品が見つかつたぞ、早く捕ましろ」と叫ぶと、大勢が一斉に飛びかかり、ついに許宣を縛り上げた。まるで

数羽の鷹がつばめを追い 一群れの虎が羊を食う

許宣被捉再三分辯、衆人那裏聽他？ 適值府尹坐堂、衆人竟押上堂來。府尹因問道「穿的衣服、扇子、既已現現被捉、其余金珠脏物現在何処？」從實供來、免受拷打。許宣稟道「小的穿的衣服物件、皆是妻子白娘子贈嫁的、怎說賊脏？」望相公明鏡詳察。太尹道「好胡說！獲物現与单对、怎敢以妻子推託？且你妻子今在那裏？」許宣道「現在吉利橋王主人樓上」。太尹即差緝捕、押了許宣、速拿白娘子來審。衆人一闖到了店中、王主人見了、驚問道「做甚麼？」

許宣道「白娘子害我、特来拿他」。王主人道「白娘子如今不在樓上了。因你承天寺不回、他同青青来寺前尋你、至今未回」。緝捕見說白娘子不在家、便鎖了王主人来回太尹。太尹道「婦人家尋丈夫、諒去不遠」。着王主人尋拿、許宣寄監、候拿到白氏、審明定罪」。

許宣は捕えられて再三弁明したが、役人たちはまったく聞き入れない。府尹が裁きの場に着席すると、役人たちは許宣をその場に護送した。府尹が「着ていた衣服や扇子はすでに押収したが、残りの盗品はどこにある？ ありのまま白状すれば拷問は許してやる」と問うと、許宣は「私の着ていたものはすべて妻の白娘子が渡してくれたものです。なぜ盗品だなどとおっしゃるのですか？ どうか賢察ください」と言った。府尹が「でたらめを言うな！ 押収品はこの盗品一覧表と同じものなのだ。なぜ妻のせいにしようとする？ お前の妻は今どこにいるのだ？」と問うと許宣が「今は吉利橋の王主人の家にいます」と答えたので、府尹はすぐに捕吏を差し向け、許宣を先に立てて速やかに白娘子を捕え、取り調べようとした。役人たちが店に着くと王主人はそれを見て驚き、「どうしたのですか？」と尋ねた。許宣が「白娘子が私を陥れたのです。彼女を捕まえに来ました」と言うと、王主人は「白娘子は今いませんよ。あなたが承天寺から帰ってこないの、青青と一緒に寺まで探しに行ったり帰ってこないのです」と言った。捕吏は白娘子が家にいないと聞くと、王主人を連行して府尹のところへ戻った。府尹は「婦人は夫を探しに行つたわけだから、そんなに遠くまでは行っていないだろう。王主人についていつて捕えてこい。許宣は監禁しておけ。白氏がやってきたら

罪の所在を明らかにしよう」と言った。

此時周將仕見拿着了許宣、正立在府門前催審、忽家人来報道「金珠等物都在庫閣頭空箱子内尋着了」。周將仕慌忙回家看時、果然全有、只不見扇子・扇墜。將仕道「扇子或有相同、明是屈了許宣」。便又到府中暗暗与該房說知、有了情由、叫他釋放許宣。故不復問罪、只說地方不相宜、改配鎮江。將行、恰好杭州邵太尉又使李募事到蘇州幹事。李募事記掛着許宣、忙到王主人家来看他、聞知改配、李募事因說道「鎮江的李克用、是我結拜的叔叔、住在針子橋下、開生藥鋪。我写書与你、投他自有好处」。

周將仕は許宣が捕えられたと知り、府門の前に立つて裁判の開始を促していたが、そこへ家の者がやってきて「財宝などはみな藏の棚の空箱の中にありました」と報告した。周將仕が慌てて家に帰って見てみると盗品はすべてそこにあり、ただ扇子と下げ飾りだけがなかった。將仕は「扇子はもしかしたら他に同じものがあるのかもしれない。明らかに許宣は無実だ」と思い、すぐにまた役所へ行き、こっそりと役人に事情を説明し、許宣を釈放してもらつた。そして二度と許宣を罪に問わなかったのだが、ただこの土地にいさせるのはあまりよくないということで、鎮江に流すことにした。そこへちょうど杭州の邵太尉が、蘇州へ李募事を派遣した。李募事は許宣のことを心配しており、急いで王主人の家へ行つたところ、配流のことを知つた。李募事は「鎮江の李克用は私の義理の叔父で、針子橋のたもとで薬屋を開いている。手紙を書いてやるから、彼に渡せばよくしてくれるだろう」と言った。

許宣得書、同差人不數日到了鎮江。尋到李克用家、見了李克用、將書投上、說道「小人是杭州李募事<sup>2</sup>的舅子。家姐夫有書在此、求老將仕青目」。李克用看了書、便請兩個公差同他入去喫飯、一面即差當直的同到府中下了公文、使用些錢鈔、保領回家。公差討了回文自去。

許宣は手紙を受け取り、護送役人と一緒に数日も経たぬうちに鎮江に着いた。李克用の家を尋ねて面会すると、手紙を渡して「私は杭州の李募事の義弟です。義兄からの手紙をお持ちしました。お目をかけてくださいますようお願いいたします」と言った。李克用は手紙を見て、役人と許宣を家に入れて食事をさせ、一方で使用人を許宣たちと一緒に役所へ行かせて公文書を出し、金を使って保釈させた。役人たちは返書を受け取って帰っていった。

許宣到家、拜謝了克用。克用見書上說許宣原是生藥店中主管、便留他在店中做買売。看了幾日、見他十分精細、甚是喜歡。許宣恐衆人妬忌、因邀他們到酒肆中一叙、通通河港。衆人喫完散去。許宣還了酒錢出門、覺道有些醉意、恐怕冲撞了人、只低着頭往屋簷下走。不期一家樓上推開窓、播下熨斗灰來、飛了一頭。許宣便立住脚、罵道「誰家不賢之婦！難道眼睛瞎了？」只見那婦人走下樓來道「官人休罵、是奴家一時失誤。許宣抬頭看時、不是別人、恰正是白娘子、不覺怒從心上起、因罵道「你這賊妖婦、連累得我好苦！喫了兩場大官司！蘇州影也不見、却躲在這裏！」遂走上前、一把捉住「今日決不私休了！」白娘子忙陪笑臉道「一夜夫妻百夜恩、你不消着急、

且聽我說明了。若有差錯、再惱也不遲。前日那些衣服、扇子、都是我先夫留下的、又不是賊贓。因你恩愛情深、故叫你穿在身上、誰知被人誤認。此皆是你年災月晦、与我何干？」許宣道「那日我回來尋你、如何不見、反在此間？」白娘子道「我到寺前尋你、聞知你被捉、決要連累我出醜、只得叫青青討隻船、到此母舅家暫住、好打聽消息。我既嫁了你、生是許家人、死是許家鬼、決不走開。今幸相逢、任你怎麼難為我、我也不放你了」。許宣被他一頓甜言說得滿肚皮的氣都消了、因說道「你在此住、難道是尋我？」白娘子道「不是尋你、却尋那個？還不快上樓去」。許宣軋過念來、竟酥酥的跟他上樓去住了。正是

許多惱怒欲持刀 幾句甜言早尽消

豈是公心明白了 蓋因私愛乱心苗

許宣は家に着くと克用に札を言った。克用は手紙に許宣がもともと藥屋の番頭であつたと書いてあるのを見て、自分の店で仕事をさせることにし、何日か様子を見たところ、仕事ぶりがたいへん丁寧だったので非常に気に入った。許宣は他の人たちに妬まれるのを心配して、酒屋に皆を招待して親睦を深めようとした。皆が飲み食いを終えて帰り、許宣が代金を支払つて店を出たところ、少し酔いを覚えたので、人につかたてはいけないと思い、頭を低くして家の軒下を通つて行つた。すると不意にある家の楼上で窓が開き、火熨斗の灰が頭に降つてきた。許宣は立ちすくみ「どこの家の馬鹿女だ！目が見えないのか」と怒鳴った。すると婦人が下まで降りてきて、「どうぞお怒りにならないでください。私の粗相でございました」と言つたので許宣が顔を上げ

て見ると、それは他でもない白娘子であつた。思わず怒りがこみ上げてきて、「この妖婦め！俺を巻き添えにしてさんざん苦しめやがつて！二度も裁判にかけられたんだぞ！蘇州で影も形も見えなくなつたと思つたらこんなところにいるとは！」と怒鳴り、白娘子をしつかりつかまえて「今日は出るどころへ出るぞ！」と言つた。白娘子は笑いながら「一夜の営みをした夫婦には百夜の恩があると申します。そんなに焦らずに、まずは私の話を聞いてください。もし何か間違いがあつたなら、それから怒つても遅くはないでしょう。あの日の服や扇子はすべて前の夫が残しておいたもので、盗品ではありません。あなたの愛情がとても深かつたので、身につけていただいたのです。誰が人に盗品と間違われるなどと思うのですか。これらは皆あなたがたまたま災難に見舞われたというだけで、私には何の関係もありませんわ」と言つた。許宣は「あの日私は家に戻つてからお前を探し回つた。どうしてあのときは見つからず、今こんなところにいるんだ」と尋ねた。白娘子は「あなたを探して寺の前まで行つたとき、あなたが捕えられたと聞き、必ず私にも累が及んで恥をさらすことになると思つたので、青青に船を用意させ、ここの叔父のもとにしばらく身を寄せてあなたの消息を尋ねるしかなかったのです。私にもうあなたに嫁いでいますから、生きては婚家の者として、死しては婚家の鬼として、決してあなたのもとを去ることはありません。今、幸いにもこうして巡りあえたのですから、たとえあなたがどれだけ私を苦しめても、私はもうあなたのもとを離れません」と言つた。許宣は彼女の甘い言葉によつて腹いっぱい怒り

も消え失せ、「まさかお前はここで私を探していたのか？」と聞いた。白娘子は「あなた以外に誰を探すのですか。早く上に行きましようよ」と言つた。許宣は思い直して、結局ふらふらと彼女と一緒に上へ上がり、そこに泊まることになった。まさに殺したいほど憎んでいたが、甘い言葉でその気は失せた。本当のことは分かっているが、愛ゆえに心乱される。

許宣と白娘子住了一夜、相好如初、依旧同搬到下処過日子。一日、是李克用的寿誕、夫妻二人、買了燭・麵・手帕等物、同到李家來拜寿。李克用安排筵席、留親友喫酒。原來李克用是個色中餓鬼、一見丁白娘子生得如花似玉、却便或東或西、躲着偷看。忽一會兒、白娘子要登東、便叫養娘指引他到後面僻靜處。李克用却暗暗閃在一邊、讓白娘子到後面去了、他却輕腳輕手悄悄跟到東廁的門縫裏張看。不張看猶可、一張看、內裏那有個如花似玉的佳人？但看見一條吊桶籠的大白蛇、盤在東廁之上、兩眼就似燈盞、放出金光來。李克用突然看見、驚個半死、忙往外跑、剛跑轉彎、腿脚戰、早一交跌倒、面青唇紫、人事不知。養娘看見、慌忙報知老安人並主管、用安魂定魂丹服了、方纔醒轉。老安人忙問「這是為何？」李克用不好明言、只說「連日辛苦、一時頭風病發。不妨不妨、你們自去飲酒」。

許宣は白娘子と一夜を過ごし、その仲睦まじいことといつたらはじめの頃のように、また元のように同じ宿に引越して日を過ごした。ある日、李克用の誕生日のお祝いがあるというので、夫婦二人は蠟燭・麵・手拭などを買つて李家に行き、祝辭を述べた。李克用は宴席を設け、親類や友人と飲み食いをしたが、彼はもと

もと色魔であつたので、白娘子的花や玉のような美しさを見ると、うろろしながら何とか覗き見ようとした。少し経つと白娘子が廁へ行こうとしたので、下女に指示して彼女を後ろ側の廁に案内させた。そして李克用はこっそり隠れて、白娘子を後ろの方へ行かせ、自らは音を立てないように忍び足で、声を潜めて廁の戸の隙間から覗いた。覗かなければよかったのだが、覗いてみると中にいるのは花や玉のような美人ではなく、釣瓶ほどの大きさもある白蛇が廁の上でとぐろを巻いて、燈臺のような両眼から金色の光を放っている姿であつた。李克用はいきなりそのようなものを見たので死ぬほど驚き、急いで外に逃げ出したが、角を曲がると足が震えてひっくり返り、顔面蒼白で唇は紫色になり、人事不省に陥つた。下女がそれを見て、慌てて夫人や手代に知らせ、安魂定魄丹を飲ませると、やっと正氣に戻つた。夫人に「いったいどうなされたのですか?」と尋ねられても正直に言えることではないので、李克用は「連日の疲れが出てちよつと頭が痛くなつてしまつた。かまわないから皆は酒を飲んでくれ」とだけ答えた。

衆人飲散、白娘子回家、恐怕李克用到鋪中对許宣說出本相来、便心生一計、只是嘆氣。許宣道「今日出去喫酒、是快活事、因何嘆氣?」白娘子道「説不得。你道李克用這老兒是好人麼? 竟是假老實。見我起身登東、他遂躲在裏面、欲要姦騙我、扯裙扯褲來調戲、我叫起來、又見衆人都在那裏、怕裝幌子、只得推倒他、方得脫身。這惶恐、却從那裏出氣?」許宣道「既不曾玷汚你、他是我主人家、出于無奈、只得忍了。以後再休去了」。娘子道「既如此、我還有二

三十兩銀子在此、何不辭了他、自到馬頭上開個小藥鋪? 豈不強如去做主管?」許宣道「好」。忙与李克用説了。李克用自知惶恐、也不苦留。

皆が飲み終わつて帰つてしまつと白娘子も家に帰り、李克用が店で許宣に自分の正体のことを話すのを恐れて、一計を案じ、ため息をついてみせた。許宣は「今日は宴会で楽しかつたのに、なぜため息などつくんだね」と聞いた。白娘子は「申し上げにくいことですが、あなたは李克用をよい人だと思つていらつしやるのですか? あれは誠実を装っているだけです。彼は私が廁へ行くのを見るときに隠れて、私を犯そうと裙や袴を引つ張つて戯れてきたのです。私は叫ぼうとしましたが、人がたくさんいたので恥ずかしくてそれでもできず、彼を押し倒してようやく逃げ出すことができましたのです。この悔しさをどこへぶつけばよいのでしょうか!」と言つた。許宣が「まあ、汚されたわけではないし、彼は私の主人なのだから我慢するしかない。今後、お前はもう行かないようにしなさい」と答えると、白娘子は「このようなことが起こり、私にはまだ二三十両のお金があるというのに、どうして彼のところをやめて自分で渡し場に薬屋を開こうとしないのですか。番頭であることにこだわる必要などないでしょう」と言つた。許宣はそれに同意し、すぐ李克用に話した。李克用も後ろめたいことがあつたので引き留めはしなかつた。

許宣自開店後、生意日盛一日。忽一日、是七月初七、乃英烈龍王生日、許宣要去燒香。白娘子先再三勸他不要去、見他定要去、因説

道「你既要去、只可在山前山後大殿上走走、切不可到方丈裏去与秃子講話、恐他又纏你布施」。許宣道「這個使得、依你便了」。遂在江邊搭了船、徑投金山寺來。先到龍王堂燒了香、然後各處閑走走看看、無心中忽走到方丈裏去、看見許多和尚圍着、像說法一般、方想起妻子叮囑之言、急急退出、却不防座上大和尚早看見了道「此人滿臉妖氣」。因分付侍者、叫他來說話。及侍者下來叫時、許宣已出方丈去了。大和尚見叫他不着、便自提了禪杖、趕將出來、趕到寺前、見衆人皆欲渡江、因風大尚立在門外等待。忽見江心裏、一隻小船飛也似來得快。衆人都驚道「這些些小船怎麼不怕風、又來得快？」

許宣が店を開いてから、商売は日々繁盛していった。七月七日、この日は英烈龍王の生誕の日であるので、許宣は焼香に行きなくなった。白娘子は再三行かないように勧めたが、彼がどうしても行くというのを見て、「お出かけになるのですしたら、ただ山の前後の本堂にだけお参りして、決して方丈の中に入ってお坊さまと話したりはしないでください。きつとまたお布施を要求してきますから」と言った。許宣は「わかった、言うとおりにするよ」と言つて、川辺で船に乗り、まっすぐ金山寺へ行つた。まず龍王堂で焼香をして、その後いろいろ見て回っていたが、いつの間にか方丈の中へ来てしまった。多くの和尚が説法をしているのを見て、妻に言われたことを思い出し、急いで外に出ようとしたとき、不意に座の上にはいた大和尚が彼を見て「この人は頭に妖気がみなぎっている」と言い、侍者に命じて彼を連れてこさせ、話をしようとした。しかし侍者が彼を呼びに行つたとき、許宣はすでに方丈を出てしまつていた。大和尚は彼を呼び止められなかったのを

見て、自ら禪杖を手にして、彼を追つて寺の前まで行つた。そこでは多くの人が川を渡ろうとしていたが、風が強くて、門の外にたたずんでいた。そこへ川の真ん中に、一隻の小船が飛ぶような速さでやってくるのが見えた。皆は「あのような小船がなぜこの風を物ともせずにあんなに速くやって来るのだろうか」と驚いた。

此時許宣也立在衆人中伸頭爭看、不期那来的小船恰正是白娘子与青青立在上面。許宣正喫驚要問他来做甚麼、只見白娘子早速遠叫道「丈夫、風大、我特来接你、可速速上船來！」許宣見了、一時沒主意。正要下船、不料大和尚在後看得分明、大喝一声道「孽畜！你到此做甚麼？」正要舉禪杖打去、只見白娘子与青青連船都翻下水底去了。許宣看見、嚇得魂不附体、忙問人道「這禪師是誰？」有認的道「這是法海禪師、要算当今的活佛」。正說不了、那禪師早着侍者喚許宣去問道「你從何処遇此孽畜？」許宣見問、遂將前項事情從頭說了一遍。禪師道「雖是宿緣也因汝欲念太深、故兩次三番迷而不悟。今喜汝災難已過、可速回杭、修身立命。如再來纏你、可到湖南淨慈寺裏來尋我。有詩四句、你可牢記者、

本是妖蛇變婦人 西湖岸上売嬌声

汝因欲重遭他計 有難湖南見老僧」

このとき許宣も人々の中に立ち、首を伸ばして見ていた。すると意外にも、小船に立っているのは白娘子と青青であつた。許宣は驚き、何をしに來たのか聞こうと思つていたところ、その前に白娘子が遠くから「あなた、風がひどくなりましたのでお迎えに参りました。早く船にお乗りください！」と叫ぶのを聞いて一瞬

どうすればいいかわからなくなった。まさに船に乘ろうとしたとき、不意に大和尚が後ろの方でその様子をはつきり見て、「妖怪め！何をしに来た！」と叫び、禪杖で打ち据えようとすると、白娘子と青青は船ごとひっくり返って水底に消えた。許宣はそれを見て、魂も消え入るほどに驚き、慌てて「あの禪師様はどなたですか？」と人に聞いた。知っている人が「あの方は法海禪師様で、現在の生き仏のような方だ」と答えた。その話が終わらないうちに、禪師は侍者に許宣を連れて来させ、「そなたはどこであの者に会ったのだね？」と許宣に尋ねた。許宣がこれまでの出来事を最初から話すと、禪師は次のように言った。「前世からの因縁であるとはいえ、そなたの欲がたいへん深いために、二度三度と迷ってもまだ悟り得ぬのじゃ。今、幸いにしてそなたの災厄は去った。早く杭州に帰って、修身して暮らされよ。もしあやつが再びそなたに纏いついたら、湖南の淨慈寺にわしを訪ねてきなさい。このような四句の詩がある。しかと覚えておきなされ。

妖しい蛇が女に化けて 西湖で男に嬌声を売る

汝は欲ゆえ重ねて計に遭う 難あらば湖南に老僧を尋ねよ」

許宣拝謝した禪師、急急回家、果然白娘子と青青都不見了、此時方信二人真是妖精。次早、到針子橋李克用家、把前項事情告訴了一遍。李克用道「我生日之時、被他露出形来、我幾乎被他嚇死。因你怪我而去、我遂不好与你説。今事既已明白、你且搬到我家暫住住不妨」。

許宣が禪師に礼を述べて急いで家に帰ると、やはり白娘子と青青の姿は消えており、このとき、ようやく二人が本当に妖怪であ

ったことを信じた。次の日早く、針子橋の李克用の家へ行き、事のあらましを告げた。李克用は「わしの誕生日のとき、奴が本当の姿を現したのを見て、わしは奴に驚かされて死にそうになった。お前がわしのことを疑って行ってしまったので、そのことを言い出しにくかったのだ。真実はもう明らかになったのだから、お前はわしの所へ越してきてしばらく住みなさい」と言った。

過不数日、朝廷有恩赦到来、除十惡大罪、其余尽行釈放。許宣聞赦、滿心歡喜、遂拝謝李克用回家。一到家、即来見姐夫・姐姐、拜了四拜。拜畢、李募事即發話道「兩次官司、我也曾出些氣力。舅舅、你好無情、怎娶了妻子在外、就不通個喜信兒与我？是何道理？」許宣道「我並不曾娶妻。姐夫此話從那裏説起？」

数日も経たないうちに朝廷から恩赦が下り、十惡の大罪を犯した者を除くすべての者が釈放された。許宣は罪を許されたと聞いて喜びに堪えず、李克用に礼を言つて家に帰った。家に着くと、すぐに義兄と姉に会つて挨拶をした。挨拶が終わると、李募事は「二度の裁判で俺は力を尽くしてやったのに、お前はなんて薄情な奴だ。外で妻を娶ったというのに、その吉報を俺に知らせないとはどういうことだ？」と言った。許宣は「妻なんて娶っていませんよ。どこでそんな話を聞いたのです？」と言った。

正説不了、只見姐姐同了白娘子・青青從内裏走了出来道「娶妻好事、何必瞞人？這不是你妻子麼？」許宣一見、魂不附体、急叫姐姐道「他是妖精、切莫信他！」白娘子因接説道「我与你做夫妻一場、

並無虧負你處、為何反聽外人言語、与我不睦？ 我婦人家既嫁了你、却叫我又到那裏去？」一面說、一面便嗚咽嗚咽哭將起來。許宣急了、忙扯李慕事出外去、將前邊之事細細說了一遍道「此婦實是個白蛇精、不知有法可以遣他？」李慕事道「若果是蛇、不打緊、白馬廟前有個呼蛇戴先生、極善捉蛇。我同你去接他來捉就是了」。

言い終わらないうちに、姉が白娘子・青青と一緒に中から出てきて、「結婚はよいことなのに、どうして嘘をつくのですか？

この方があなたの奥さんじゃないの？」と言った。許宣は見るなり魂が抜けたようになり、「こいつは妖怪だ！ 信じてはいけない！」と叫んだ。白娘子は「私はあなたと夫婦になつてから一度も背いたことなどありませんのに、どうして他の人の言うことばかり信じて、私と仲良くしてくださらないのですか？ 私はあなたに嫁いだのです。それなのに私にどこへ行けと言うのですか」と言つてむせび泣いた。許宣は慌てて李慕事を引つ張つて外へ行き、これまでのことを細かく話し、「あの女は本当に白蛇の妖怪なのです。何か追い払う方法を知りませんか？」と尋ねた。李慕事は「蛇ならそんなに心配することはない。白馬廟の前に蛇取りの戴先生という方がいて、たいへん見事に蛇を捕まえる。一緒に先生を迎えに行つて、捕まえてもらおう」と言つた。

二人去時、適值戴先生立在門前、便問「二位有何見教？」李慕事道「舍下有一條大白蛇、相煩一捉。先奉銀一兩。待捉蛇後、另又相謝」。戴先生收了銀子、問了住処道「二位請先回、在下隨後即到」忙裝了一瓶雄黃、一瓶煮的藥水、一徑來到李家。許宣接着指他到裏

面房內去捉。戴先生走到房門前、只見房門緊閉、因敲敲門道「有人在此麼？」內裏問道「你是甚人？ 敢到此內裏來？」戴先生道「我非輕易到此、是你家特請我來捉蛇的」。白娘子曉得是許宣請來捉他、便笑說道「蛇是一條、只怕你捉他不到」。戴先生道「我祖宗七八代俱出名、叫做戴捉蛇。何況這條把蛇、怎麼就捉不到？」內裏忽開了門、說道「既會捉、請進來」。

二人が行くと、戴先生はちやうど門の前に立っいて、「何のご用ですか？」と尋ねた。李慕事が「私の家に一匹の大きな白蛇がいて、お手数ですが捕まえていただきたいのです。まず銀一兩をお支払いして、蛇を捕えてくださったあと、またお礼をいたします」と言う、戴先生は銀を受け取り、場所を尋ねて「お二人は先にお帰りください。私もすぐ参ります」と言い、急いで一瓶の雄黃と煮込んだ薬を持つて李家に行つた。許宣が出迎えて蛇のいる部屋を指すと、先生はそこへ捕まえに行つた。戴先生は部屋の前まで来て、戸が固く閉まつているのを見て戸を叩き「どなたかいらっしゃいますか？」と言つた。中から「どなた？ 何のご用でいらつしゃつたのですか？」と尋ねられたので、「勝手に参つたわけではありません。お宅の方が、私に蛇を捕まえるよう依頼なさつたのです」と答えた。すると白娘子は許宣が依頼したのだと悟り、笑つて「蛇は一匹いますが、おそらく捕まえられないと思いますよ」と言つた。戴先生が「私の祖先は七八代にわたつていずれも名高く、蛇取りの戴と呼ばれているのです。一匹の蛇ごとき、捕まえられないはずがありません」と言うと戸が開き、「それならどうぞお入りください」という声がした。

戴捉蛇纔打帳走進、只見房門口忽刮起一陣冷風來、直刮得人寒毛遍豎。早現出一條吊桶粗的大蟒蛇來、一雙眼睛就是兩隻燈盞、直射將來。戴捉蛇突然看見、喫了一驚、望後便倒、連雄黃罐兒・藥水瓶兒都打得粉碎。那蛇張開血紅的大口、露出雪白的牙齒來咬先生。

先生見來咬、慌忙爬起來、只恨爹娘少生了兩隻腳、死命的跑出堂前。

李慕事與許宣迎着問道「捉得如何了？」戴捉蛇道「原銀奉還、蛇是我捉、妖怪如何我捉得？」幾乎連我性命都送了」。頭也不回、竟跑去了。二人你看我、我看你、無計可施。軀是白娘子叫許宣入去、說道「你好大胆！怎敢叫捉蛇的來捉我？你若和我好意、便佛眼相看、若不好時、帶累一城百姓、都要死于非命」。

戴先生が帳を上げて入つてゆくと、部屋の入口のところで突然一陣の冷たい風が吹き起こり、寒氣で身の毛がよだつほどであつた。そこへ一匹の、釣瓶桶ほどの大きさの大蛇が現れ、燈盞のような二つの眼で睨みつけてきた。戴先生は突然それを見て驚き、後ろに倒れ、雄黄の缶や薬品の瓶さえも壊してしまつた。蛇は血のように赤い口を大きく開け、雪のように白い歯をあらわにして先生に噛み付こうとした。先生は噛まれそうなところを慌てて這い出ると、両親が二本の足しかつてくれなかつたことを恨み、死ぬ思いで家の前まで走り出た。李慕事と許宣が迎えに出て「いかがでしたか？」と聞くと、戴先生は「お金はお返しします。蛇なら捕まえますが、どうして妖怪など捕まえますか。命さえ危ないところでした」と言つて、振り返りもせず急いで帰つていつてしまつた。二人は互いに顔を見合わせたが、何もよい考えは浮かばなかつた。そこへ白娘子が許宣を呼んで部屋に來させ、

「あなたは本當にひどい人ね！ どうして蛇取りなんか呼んで私を捕まえさせようとするの？ もし私と仲良くしてくれるのなら大目に見てあげますが、もしそうしないのなら、この街の人々にも非業の死を遂げさせますよ」と言つた。

許宣聽了、心寒胆戰、不敢做声、便往外跑、一直跑出清波門外、再三躊躇、却無可奈何。忽想起金山寺法海禪師來、曾分付道「若妖怪再來纏你、可到淨慈寺來尋我」。今無心中走到此間、何不進去求他？遂一徑走到淨慈寺來、急問監寺「法海禪師曾到上刹來否？」監寺回道「不曾來」。許宣聽說不在、又不敢回家、性急起來、遂走到長橋、看一湖清水道「倒不如我死了罷、省得帶累別人」。正要踊身跳時、只見背後有人叫道「男子漢何故輕生？有事還須商量」。許宣回頭一看、却正是法海禪師、背馱衣鉢、手提禪杖、却好走來。許宣納頭便拜道「救我弟子一命」。禪師道「這孽畜如今在那裏？」許宣道「現在姐夫家裏」。禪師因取出鉢盂、遞與許宣道「你悄悄到家、不可使婦人得知、可將此鉢劈頭一擲、切勿手輕、緊緊按住、不可心慌、我自負道理」。

許宣はそれを聞いて心底恐ろしくなり、声も出せないまま外に飛び出し、まっすぐ清波門の外まで走つていき、いろいろ思案したものの結局どうすることもできなかった。そのとき、金山寺の法海禪師が「もし妖怪が再び纏わりついたら淨慈寺まで訪ねて来るように」と言つたのを思い出した。無心にここまでやってきた以上、どうして彼に助けを求めずにいられようか。淨慈寺に着くとすぐ、門番に「法海禪師はお寺にいらっしゃいますか？」と尋

ねたが、門番は「まだいらつしゃいせん」と答えた。許宣は家に帰るわけにもいかず、心が急き立つてついに長橋まで来てしまひ、湖の澄んだ水を見て「やはり死ぬしかない。他の人を巻き添えにするわけにはいかない」と考え、今にも飛び込もうとしたとき、後ろの方で「男子たるものがなせ命を粗末にするのか！ 何かあったのならわしに話してみよ」という声が聞こえた。許宣が振り返るとまさに法海禪師であつた。背に衣鉢を背負ひ、手に禅杖を持ち、ちょうど今やつてきたところのようである。許宣は頭を下げ、「弟子の命をお救いください」と言つた。禪師が「その畜生めは今どこにおるのか？」と尋ねたので許宣が「義兄の家におります」と言つと、禪師は鉢を取り出して許宣に渡し、「お前はこつそり家に帰り、婦人に気づかれないようにこの鉢を頭にかぶせよ。決して手を緩めてはならぬ。しつかり抑えつけ、慌てぬようにしなさい。わしにはちゃんと考えがある」と言つた。

許宣拝謝し禪師回家、只見白娘子正坐在那裏罵張罵李。許宣乗他眼慢、掩到他身後、悄悄的將鉢盂望白娘子頭上一罩、用尽平生之力、按將下去。漸漸的壓下去、壓到底、竟不見了白娘子之形。不敢手鬆、緊緊按住。只聽得鉢盂內叫道「我和你數載夫妻、何苦將我立時悶死？ 略放鬆些、也是你的情」。

許宣が禪師に札を述べて家に帰ると、白娘子が座つて何やらぶつぶつ言っているのが見えた。許宣は隙に乗じて彼女の背後に回りこみ、こつそりと鉢を白娘子の頭の上にかぶせ、すべての力を振り絞つて押さえた。ゆつくりと押さえつけていき、徹底的

に押さえきつたところで白娘子の姿は見えなくなつてしまつたが、それでも力を緩めずに強く押さえ込んでいた。鉢の中からはただ、「私たちは夫婦になつて何年にもなるのに、どうしてすぐに私を押し殺そうとするの？ 夫婦の情けで少し緩めてちょうだい」という声が聞こえてきた。

許宣正没法处置、忽報道「外辺有一個和尚、説來収妖怪の」。許宣聽得、忙叫李募事快請進來。禪師到堂、許宣說道「妖蛇已罩在此、求老師發落」。不知禪師口裏念些甚麼、念畢揭起鉢盂、只見白娘子縮做七八寸長、如傀儡一般、伏在地下。禪師喝道「是何孽畜？ 怎敢纏人？」可說備細。白娘子道「我本是一蟒蛇、因風雨大作、來到西湖、同青魚一処安身。不想遇着許宣、春心蕩漾、按納不定、有犯天條。所幸者、實不曾傷生害命。望老師慈悲」。禪師道「淫罪最大、本不當恕、姑念你千年修鍊、僅免一死。快現本相！」白娘子乃現了白蛇一條、青魚乃現了青魚一尾。那白蛇尚昂起頭來望着許宣。禪師因將二怪置于鉢盂之內、扯下襦衫一幅、封了鉢盂口、拿到雷峰寺前、將鉢盂放下、令人搬磚運石、砌成一塔、壓于其上。後來許宣又化緣而成了七層、使千年萬載白蛇與青魚不能出世。禪師自鎮庄後、又留偈四句道

雷峰塔倒 西湖水乾

江湖不起 白蛇出世

許宣がどうしたものかと思つてゐると、「外に和尚さまがいらつしやう、妖怪を封じ込めに來たとおつしやっています」という知らせがあつた。許宣はそれを聞いて、すぐ李募事に頼み、禪師

を呼んできてもらった。禪師がその場に着くと、許宣は「妖蛇はこの中にいます。ご処置をお願いします」と言った。禪師は口の中で何やら唱え始め、唱え終わると鉢を開けた。すると白娘子は七八寸の長さに縮んでしまっており、まるで傀儡のように地面に伏せていた。禪師が「お前は何者で、なぜ人にまとわりつくのか詳しく話してみよ」と言うと、白娘子は「私はもとと一匹の蟒蛇でございました。激しい風雨のために西湖に参りまして、青魚と同じところに身を寄せておりまして、思いがけずも許宣さまにお会いして、春情が動くのを抑えきれず、天の掟を犯してしまったのです。ただ幸いなことに、私は人の生命を害したことはありません。どうか老師さまのお慈悲をお願いいたします」と言った。禪師は「淫の罪は最も重い。本来なら許すべからざることであるが、ひとまずお前の千年の修行に免じて、死だけは許してやろう。早く本来の姿を現せ」と言った。すると白娘子は一匹の白蛇になり、青青は一匹の青魚になったが、白蛇はなお頭をもたげて許宣を見つめていた。禪師はこの二匹の妖怪を鉢の中に入れ、僧衣を引き裂いて鉢の口を閉じ、雷峰塔の前へ運んで鉢を埋め、人々に煉瓦や石を運ばせてその上に塔を築き、穴をふさいだ。その後、許宣は布施を募って七階建てにし、永久に白蛇と青魚が世に出てこれられないようにした。禪師は妖怪を調伏した後、四句の偈を遺した。

雷峰塔倒れ 西湖の水乾き

江湖起こらざれば 白蛇世に出づ

法海禪師頌罷、大衆作礼而散、惟許宣情願出家、就拜法海禪師為師、披剃于雷峰塔下。修行有年、一夕、無病坐化。衆僧買龜燒骨、造骨塔于雷峰塔下。怪蹟雖不足紀、然雷峰自此而成名于西湖之上、故景仰雷峰、又不得不憑弔其怪事云。

法海禪師が偈を唱え終わると、人々は礼をなして帰ったが、許宣は出家を願ひ、法海禪師を師とし、雷峰塔の下で剃髪した。そして長年の修行の後、ある夕べ、病もないまま遷化した。僧たちは厨子を買って茶毘に付し、骨塔を雷峰塔の下に作った。怪異は記録するに値しないが、雷峰塔はこれ以来、西湖の上に名をなした。それゆえ雷峰塔を仰ぎ見ると、その怪事が偲ばれるのである。

#### (注)

(1) これまで「府尹」とあったものが、この箇所以降すべて「太尹」となる。本文は底本のままとし、改めることはしない。

(2) 底本「幕事」。以下、同様の誤刻が散見されるがいちいち注しない。

(3) 「河港」では意味不明。音が似ている「喝乾」の当て字であろうか。

(4) 底本「慰」。

(5) 「道」「説」あるいはそれに類する文字が脱落している。

(6) 底本「悔」。

(7) 底本「灣」。

(8) 原文の「怪」は「なじる」の意である可能性もある。

(9) 底本は重字を用いる。

(10) 底本「倒」。直後の戴先生の台詞における「捉不到」も同様。

(11) 底本「到」。

(12) 底本「到」。

(13) 底本「演」。

(14) 底本「修煉」。

【附記】本来ならば訳文とともに語釈を附すべきであるが、紙幅の都合でかなわなかった。諒とされたい。また、本稿執筆にあたり、上田望先生と徐文輝氏のご教示を得ました。ここに記して謝意を示します。なお、本稿は平成二十四年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による成果の一部です。